

## 平成30年度第2回長野県総合教育会議

日 時：平成30年12月20日(木)

10時30分～12時00分

場 所：県庁 議会増築棟 3階  
第1特別会議室

### 1 開 会

(小岩企画振興部長)

これより、平成30年度第2回長野県総合教育会議を開会いたします。本日の進行を務めます、企画振興部長の小岩でございます。よろしくお願いいたします。

それでは最初に、阿部知事からあいさつをお願いします。

### 2 あいさつ

(阿部知事)

改めまして、おはようございます。

本日は、本年度第2回の総合教育会議ということで、各教育委員の皆様方にお集まりいただき、大変ありがとうございます。また、今日は県立大学から東准教授にもご出席いただいております。大変ありがとうございます。

本日のテーマは、平成31年度の教育関係予算についてということであります。学びの県づくりということで、今年度から新しい総合計画の大きなテーマとしてこの教育、人づくりを掲げて取り組んでおりますけれども、今年度予算は計画策定と並行しての予算編成でありました。そういう意味で、平成31年度、来年度予算は新しい総合計画をしっかりと踏まえて、この学びの県づくりを着実に進めていく予算にしていかなければいけないと思っております。教育委員会も、そして私ども知事部局も、こども・若者に関する施策が様々ありますので、整合性を取りながら、そして教育委員会と知事部局の予算が相乗効果で子どもたちにとって、長野県の教育・人づくりにとって本当に意義のある、効果のあるものにしていきたいと思っております。

最終的に予算を決定いただくのは県議会でありますし、私のところで予算全体の取りまとめをさせていただくわけですが、教育委員の皆様方の率直なご意見をいただきながら良い形の予算をつくっていききたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

学びというテーマでやるべきことは様々ありますが、この学びの県づくりに、私としてはこだわりを持ちながら県政を進めていきたいと思っておりますので、各委員の皆様方の引き続

きのご協力、ご支援をいただきますことを心からお願いを申し上げて、私からの冒頭のあいさつとしたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

(小岩企画振興部長)

続いて、原山教育長から申し上げます。

(原山教育長)

おはようございます。新年度予算の私たちのテーマは、幼保小中高を通じて一貫した、学びのあり方を追求したいというのがテーマであります。

学校に入る前というのは世の中のことがわかっていないことだらけなのですけれども、学校に入った途端に、世の中わかっていてことだらけみたいな話になって、でも、実際に社会に出たら、やっぱりわかっていないことだらけだと。一体どちらが本当なのか。やはり世の中、わかっていないことだらけというのが本当なのかと。ではどうしたらいいのかといたら、それは、やはり、試行錯誤して、いろいろなところからフィードバックをもらって、そして、それを探していくしかない。そのフィードバックの中には「お前、そんなこと知らなかったのか」というのも入ってくるだろうと思っていまして、「先生」というのは、その試行錯誤に対して愛情を持ってつきあってくれる人ではないかと思っています。

これからご説明させていただきますけれども、そういった一貫したテーマのもとに今回の予算案を組み立てたと思っておりますので、忌憚のないご意見をいただけたらと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

### 3 報告事項

高等教育機関と連携した創造的な学びの創出について

(小岩企画振興部長)

本日の会議でございまして、お手元にあります次第に沿って進めたいと存じます。

まず報告事項からでございます。これは前回の6月の総合教育会議で議題としてご議論いただきました、高等教育機関と連携した創造的な学びの創出について、その後の状況についての報告です。お手元の資料1をご覧くださいながら進めさせていただきたいと思っております。佐藤こども・若者担当部長から説明をお願いいたします。

(佐藤こども・若者担当部長)

佐藤でございます。よろしく願いいたします。

今、お話にありましたとおり、前回、県内の高等教育機関と高等学校との連携した創造的な学びの創出ということでご議論いただいたところです。

今回は、県、県教育委員会、県内高等教育機関により具体的な案を策定してまいりまし

たので、これに対してご意見をいただければと思います。

資料に入ります前に、6月以降の状況を報告させていただきます。6月の総合教育会議の後、高等教育コンソーシアム信州運営会議におきまして、県内大学の学長さん等に、県民文化部と県教育委員会で高大連携の取組ということでお話をさせていただき、その後各学校に出向きまして、今後連携を推進したい事業等をご提案しました。それぞれいろいろご意見をいただき、協力したいなどの回答をいただいたところでございます。

さらに、この高大連携のプログラムがニーズに沿ったものになるよう、10月に、県教育委員会から全ての県立高校に対して、高校単位及び高校生個人のニーズ調査を行っていただきました。こうした高校側、大学側とのやりとりを踏まえて作成いたしましたのが資料1になります。資料1をご覧ください。

信州高大連携「探求的な学び」プロジェクトということで、高大連携による主体的な学びを通して、「信州で学び続ける」若者を増やしていきたいと思っております。変化の激しい、これからの社会を生き抜いて活躍できる資質、能力の育成のために、高大連携によって高校だけでは学べないプログラムなどを提供することで、高校生、また高校生と関わる大学生の、学びのモチベーションの向上を図りたいと考えております。

左側の県内高等学校という欄にあります。これまで各高校が各大学等の教員と協力して、それぞれ高大連携の取組を実施しております。これは基本的には高校単位による連携でした。10月に実施したアンケートにおきましては、生徒個人からは、例えば身近な経済やマーケティングについての講義、心理学についての講義、地場産品やマネジメントなどの地域づくりの講義などを学びたいという要望が出てきていますが、これらの要望に対して、これまでではなかなか応えることが難しい状況でした。そうした状況に対しまして、県と教育委員会事務局とで新たに高大連携のプラットフォームを形成することで、県内全ての高校からの連携ニーズを、県内大学・短大等に伝達するとともに、個々の生徒にも着目して、高大連携によるオーダーメイドの主体的な学びの機会を提供したいと考えております。こうした取組を通じて、連携を加速していければと思います。

具体的なテーマでございますけれども、資料1の真ん中あたりに記載してありますが、グローバルな学びへの招待、ブリッジプログラム、信州PBL講座、高校生の卓越性支援の4つを考えております。このうち、この信州PBL講座につきましては、後ほど長野県立大学の東准教授からお話ししたいと思っております。また、最後の高校生の卓越性支援というところで、EdTechを活用したSTEAM学習プログラムが出てまいりましたので、もう一つ資料を用意しました。資料1の参考資料をご覧ください。諸外国の教育の現状に関する参考資料でございます。経済産業省の研究会の資料になります。その中では、世界が求める人材とは、科学技術を初めとした幅広い知見／知識を持ち、それを「適切に活用」し、「自ら変革／革新を起こせる」人材と、ここでは規定がされています。その下に、各国の背景や求める人材などがまとめられておまして、その次のスライドから3枚は、世界が求めるような人材を育成していくために、それぞれの国がどのように取り組んでいるかといった学びのあり方の現状が示されています。アメリカ、中国、それか

らイスラエルの状況が示されています。

まとめとして、世界の教育のトレンドということで3つのポイントが挙げられています。1つは関心・理解度に応じたアダプティブ学習に適応した学習の個別化、それからPBLとSTEAMs学習ということで、プロジェクトを通じた教科横断的な知識理解と活用、そしてそれらを支えるためのEdTechの活用、効果的・効率的にするテクノロジーの活用です。STEAMsとは、それぞれ科学、技術、工学、芸術、数学の頭文字をとったものでございます。そういった数学的、科学的な基礎を育成しながら技術や工学を応用して、創造的な思考で現在社会の問題解決に取り組むものとされています。6月の日本経団連の「今後のわが国の大学改革のあり方に関する提言」の中でも、「Society5.0により生まれる新たな科学技術を社会実装するうえで、経済、経営、法律、倫理哲学などの人文社会科学系の知識や専門性が必要であることは論を俟たない」とされていて、具体的には文系学生にはSociety5.0で必要な技術や数理データ処理に関する素養を、また理系学生には、グローバル人材に求められるリベラルアーツの素養をそれぞれ身につけるようにするという提言がされているところでございます。こうした国内外の動きも参考にしながら、この高大連携の取組を進めていければと思っております。

最後に、本プロジェクトのさきがけである、長野県立大学の信州PBL講座における取組の発表をお願いしたいと思います。県立大学におきましては、既にPBLを取り入れた発信力ゼミを展開しておりまして、今年度の取組内容や来年度に向けての展望について、指導教官の東准教授から発表していただきます。

東俊之准教授でございますけれども、京都産業大学大学院マネジメント研究科、マネジメント専攻の博士課程を修了され、長野県立大学の開学に合わせてグローバルマネジメント学部へ配属されました。専門分野は、経営組織論、組織間関係論でございます。

今年度は、1学年の発信力ゼミをご担当され、大学の学習・研究を円滑に進めるためのスキルの習得、文章能力やプレゼンテーション能力など、自らの考えを表現するための発信力の獲得を目標に学生を指導されています。それでは東先生、よろしくお願ひします。

(東長野県立大学准教授)

ありがとうございます。ただいまご紹介いただきました長野県立大学の東と申します。着座にて失礼いたします。

本日は、「高等教育機関と連携した創造的な学びの創出について」ということでご報告させていただきます。資料2をご準備いただければと思います。少し大げさなタイトルをつけておりますが、主に本学、長野県立大で行っている県内の高校との連携、特に私が担当している発信力ゼミにおける取組について報告させていただきます。それから、今年度の取組だけでなく、今後の展望、また高校生に対して期待すること、こちらも含めて報告させていただきたいと思っております。

資料2を1枚めくっていただきまして、スライド番号3をご覧ください。主に発信力ゼミで連携してきた内容は、2回にわたるのですけれども、長野県教育委員会教学指導課の

職員の方の見学並びに長野県の高校の先生方の見学、この2回を行ったところです。見学という段階にとどまっておりますので、十分な連携が出きているとは言えないかもしれませんが、とりあえずこれが第1歩とご理解をいただければと思っております。

先ほどから「発信力ゼミ」という言葉を何度も繰り返しています。前回、6月のこの会議で、本学の金田一学長からも簡単にご説明をいたしましたし、先ほど佐藤部長からもお話がありましたが、少しだけ、私からもご説明させていただきます。

スライド番号6をご覧ください。本学で行っている発信力ゼミですが、他大学でも行われている初年次教育の一環と理解していただければと思います。特に他大学の初年次教育と違うところは、自ら問いを探し、情報知識を収集し、それを文章や発表を通じてアウトプットする。発信力ゼミというタイトルがついていますので、アウトプットすることに重点を置いています。詳細に関しましては、後ほど資料をご覧くださいと思いますが、特徴的なのは、学部学科を越えて、現在15クラスに分けて実施しているところです。少人数教育をしております、1クラスあたり16名、多いところでも18名程度の人数に分けています。少人数教育なので、それだけ教員と学生との距離が近い科目になっています。

スライド番号7をご覧ください。15クラスに分けていますので15名の担当教員がおりますが、それぞれの担当教員の専門分野から、あらかじめ1つのテーマを示しています。そのテーマに関して学生に希望を取りクラス分けをしています。テーマによってはどうしても人数が多くなってしまいますので、学生の希望には必ずしも沿えていないところがあります。ちなみに、私のクラスでは伝統産業をテーマにゼミを行っています。授業の内容に関しましては、今年度は、授業担当者の裁量に任せている面が多かったので、必ずしも私の発表の内容と他の先生方の授業内容が全く一致しているということはないとご理解いただければと思います。

戻っていただきまして、スライド番号3をご覧ください。最初に発信力ゼミで県内の高校、高校といいましょうか、県教育委員会の方に見学いただきましたのは6月20日です。私のゼミではPBL型の授業を行っていますが、それを見学いただいた後、今後どういった連携が可能なのかということについて打ち合わせを行いました。

スライド番号4をご覧ください。本格的にPBLの「講座」というとちょっと大げさかもしれませんが、高校の教員、先生方に見学いただいたのが、先月11月28日です。ちょうど1か月前ですね。発信力ゼミを行っている教室が少し狭いもので、高校の先生方7名ということになりましたが、7名の先生にご参加いただきまして、それから2名の県教育委員会事務局教学指導課の方と共に見学をいただきました。見学だけでなく、その後、研修会ということでディスカッションの場を設けました。簡単に申し上げますと、見学していただいた後の意見交換を通して、内容をさらに深めてもらうということを行ったのが、先月の内容です。

スライド番号5をご覧ください。この内容に関しては今後ということになるのですが、来年1月23日、実は、これが本学の発信力ゼミの最後の時間になるのですけれども、合同発表会を計画しております。この合同発表会も見学いただき、その後に研修をしていただ

こうと思っています。

ここでは、公立高校の先生方だけでなく、各校の生徒さん、主に探究学習のコアメンバーやファシリテーターの生徒を中心として、生徒さんにも見学いただきたいと思っています。見学といいましても、ただボーッと聞いているだけではなく、評価シートの記入などもお願いしたいと考えています。現在、進めている連携につきましては、以上です。

スライド番号8をご覧ください。その他、本学と県内高校との連携としましては、主に教員間、特定の教員が高校との関係で行っているものです。例えば「象山学」という授業があります。これはゲストスピーカーを招いての1年生向けの授業なのですが、こちらに市立長野中学・高等学校の生徒さんにご参加いただいたこともありました。

それから、今後になりますが、長野吉田高等学校の探究学習において、1年生の学年発表会での本学学生の模擬プレゼンテーションを予定しています。また、須坂高等学校におきましては「哲学対話」というものを、本学の馬場先生が実施されています。

スライド番号9をご覧ください。11月28日の発信力ゼミには、教員研修という形で高校の先生方に入ってくださいました。先ほど申し上げましたように、それぞれ別々の高校の先生方7名、県教育委員会事務局教学指導課の方2名に入ってくださいました。私のクラスでは「伝統産業」を発信力ゼミのテーマにしております。「伝統産業の課題解決の提案」をテーマに、今回はPBL型の授業として実施しました。当日は、こちらを見学いただいています。

スライド番号10をご覧ください。これは、その時の様子を写真と言葉で説明したものです。こういった形で、学生が、スマホを使って自分自身で情報を収集したり、ポストイットを使って情報を整理したり、ブレインストーミングやKJ法などで情報を整理したり、それから本学の場合、教室によっては壁がホワイトボードになっているところがありますので、そこに書き込んで情報を整理したりと、こういった活動をご見学いただきました。

スライド番号11をご覧ください。見学の後に、PBLについての意見交換会を行いました。ここでどういった意見が出てきたかということランダムに並べております。PBLの効果と課題についてですが、6月の段階でも見学いただきました県教委の小川先生から、学生の主体性、協調性、コミュニケーション力は確実に成長しているというお言葉をいただきました。それから、我々授業担当者からは、テーマの設定が重要、途中で変更することも有用な場合があり、テーマ変更をグループ活動で議論することも必要だという意見がありました。この辺は我々授業担当者の教員の考えを、高校の先生方にもお示ししたとご理解いただければと思います。

それから、PBLには型、つまりワークシートが重要になってくる。この型がないと主体的に進められない学生もいるので、この型をつくるのが重要になってくる。ただし、発信力ゼミもそうなのですが、まだ手探りの状態なので、このあたりを高校の先生方、あるいは我々も含めてかもしれません、どのようなワークシートをつくっていくべきなのかを考える必要があると理解しています。それから自分らしい提案を引き出すことが不可欠ということ、これらを授業担当者の意見として述べています。

スライド番号12には、授業担当者の感想として、やはり他の先生方が入っているほうが学生は元気だったということが挙げられています。いつもより生き生きとディスカッションしていた。見学に来られた先生からも情報提供を受けて、学生が参考にしているところもありました。また、前学期にグループ活動していたときよりも楽しくできている。「ただし、……」ということ、一番最後に書いてありますが、情報収集と情報整理はいまひとつなのかなと思っています。インターネットのみの情報に頼りがちなので、この辺は、また高校の先生方とも意見交換しないといけない点かもしれないと思います。これはまた後ほど、申し上げたいと思います。

最後のほうになりましたが、スライド番号13をご覧ください。今後の展開を示してまいります。正直申しまして、本学はまだ開学したばかりなので、十分な高大連携の制度や体制が整っていないのが正直なところです。ですので、今後どのように進めていきたいかといいますと、発信力ゼミは、先ほども言いましたが、PBL型の授業を行っております。その発信力ゼミの活動の経験を生かして、本学とそ高校との連携を検討していきたいと思っています。まだ検討というところでとどまっております、具体的な提案ができないところではありますが、検討しております。

例えばということで、星(★)の部分をご覧ください。高校における探究学習や課題発見型の学習に、我々教員が行くよりも、むしろ年齢の近い本学の学生が例えば「アドバイザー」なり「メンター」なりとして参加するということができればいいのかというふうを考えておまして、これは現在、模索しています。既にいくつかの高校からは、こういったお問い合わせといいたまいますか、打診がありました。ただし、学生が高校生に対してメンターやアドバイザーになるには、それなりのスキル・知識が必要だと思っています。これをどのように教育するかというのを、今後の課題にしていきたいと思っています。高校における探究学習の中に入ったほうが、長野県立大学の学生にとっても有益ですし、高校の生徒さんにとっても有益かと思っておりますので、こういった場はぜひつくってきたいと思っています。

それから最後、スライド番号14をご覧ください。おこがましいのですが、高校生に対して期待することを考えさせていただきました。まず1つ目として、自ら問いを立てて解決しようという姿勢を、少しでも持ってほしいなと思っています。先ほど、佐藤部長からのご案内がありまして、こういった姿勢は今後どうしても必要になってくるかと思っておりますので、高校時代から少しずつ意識していただけると嬉しいなと思っています。

それから、先ほども申し上げましたように、現在私が担当しているクラスでは、情報の集め方としては、どうしてもスマホでちゃっちゃちゃつと調べたり、インターネットで調べたり、それで終わってしまうことが多い。情報を鵜呑みにせず、多角的、批判的に検討できるような姿勢を持っていただきたいと思っています。このあたりは、高校時代から少しずつ学んでいただいたほうが良いのかなと思っています。最後、米印の部分におおげさなことを書いています。「明確な解答のない問いに挑戦し、自ら情報を集めて、批判的に考察する意識を！！」持っていただきたいと考えています。

すみません、ちょっと早口になってしまいました。私からの報告は以上です。どうもありがとうございました。

(佐藤こども・若者担当部長)

ありがとうございました。こういったような取組状況につきましても今後、県民文化部から県内大学に情報提供することによりまして、ほかの大学への波及を促進してまいりたいと考えているところです。

私からの報告は以上です。よろしく申し上げます。

(小岩企画振興部長)

ただいまの報告内容につきまして、また、東准教授からのご説明も含めまして、意見交換をいただければと思いますが、ご質問、ご意見がございましたらお願いします。耳塚委員お願いします。

(耳塚委員)

東先生、どうもありがとうございました。先生が最後におっしゃった高校への期待ということについては、私も全く同感でございます。

資料1に示されたことにつきまして、2点申し上げたいと思います。

1点は、やはり一過性の高大連携ではなく、ずっと続けていくということを考えると、大学においてもそれなりのメリットがあるという条件が必要だと思います。特に大きいのは、前回も申し上げましたけれども、やはり、いい学生の獲得につながることで、そういう意識を持てれば大学も非常に一生懸命になると思います。その意味では、この資料1にもございますけれども、特別推薦枠や入試等との連動ということが有効であると感じております。これが1点目です。

2点目はPBLについてであります。是非、こういうのは進めていただき、大学にも積極的にかかわっていただければと思うところです。特に大学でゼミナールを経験すると、学生が変わるという経験をしています。それは、知識を吸収する知識吸収型の学習、受動的な学習から、自分が新たな知識を生み出す知識生産型の学習へと変化します。これは非常に大事なことで、おそらくはこういう講座を受講すると、高校生が普段やっている勉強も変わってくると思います。ただ、せっかく高大連携で大学がこういう講座を出してくれたとしても、普段の高校の授業が相変わらずのままであれば、あまり大きな効果は期待できないと思いますので、高校の先生方の研修を重視していただければと思います。以上、2点申し上げました。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。続けてご意見、ご発言がありましたら、教育長、知事からもお願いします。

(阿部知事)

私が質問してはいけないのかもしれないけれども、この資料1は、どういう体制でどうやって進めるということなのか。構想、プロジェクトと書いてあるけれども、やりたいことを並べているだけで、あまりプロジェクトになっていないという気がするのだけれども。どういう体制でどういうスケジュールでやるとかというイメージはあるのか、その辺りを教えてもらえますか。

(佐藤こども・若者担当部長)

高校からのご意見を県教委がお聞きし、大学につなげるということを県の高等教育振興課が行い、プラットフォームというような形で進めることができ始めていますので、そのプラットフォームを活用して、こういった連携を加速していきたいと思っています。

それと、大学側にも受け入れの体制が整っている大学もありますし、まだそういった、窓口が設けられていない大学もあります。また、高校側にも同様に、個別の事情があるかと思しますので、そういったところを丁寧に、このプラットフォームを活用しながらつなげたいと思っています。現在、まだスタートしたばかりですので、これからさらにスケジュール感も持ちながらやっていきたいと思っています。

(阿部知事)

プラットフォームというのは既にあるのか、これからつくるのか、それには誰が参加しているのか。なんでこれを聞いているかという、東先生が、県立大学と高等学校との連携を検討中とおっしゃっていて、それは非常にいいことだと思うのだけれども、県の立場として他大学とか、あるいは県内高校、私学も含めて見渡したときに、どうやってみんなを巻き込んでいくのかというのが、このプロジェクトからは全く読み取れない。そこが極めて弱いのではないか。そのプラットフォームというところが多分一番肝心な部分なのだと思うが、具体的な話が全部抜けているので、そこは今どうなっているのかとか、これからどうするのかというのを教えてもらえますか。

(佐藤こども・若者担当部長)

そのところは非常にキーポイントだと思っています。県教育委員会と高等教育振興課とが、高校や大学をつなぐ部分になっていきたいと思っていますので、先ほどの県立大学からの高校との連携の要望などを、きちんとこのプラットフォームが吸い上げて、それをつなげるような形をつくっていききたいと思っています。

(阿部知事)

だから、ここは少ししつこく言うのだけれども、非常にプレイヤーが多いわけですよ。知事部局、教育委員会もまたがっているし、例えば行政側でも大学の担当と高校の担当部

局が違っているので、一体このプロジェクト、誰が責任を持ってやっていくのか。それぞれの項目について、誰が具体的に進めていくのかを決めないと、絵に書いた餅になるのは明らかだと私は思っている。そこをちゃんと振り付けているのか。構想をどう具体化するかという体制とスケジュールと役割分担をちゃんと仕込まないと、この紙を出しただけで終わってしまうのではないか。そこはもう少し具体的に詰めてもらう必要があるし、県内大学や高校の先生方の意見をちゃんと反映しないとイケないと思うので、よろしくお願ひします。

(小岩企画振興部長)

委員の先生からはいかがでございましょうか。

(荻原委員)

ありがとうございます。スキルを身につけるという意味では、高校生のうちからこういうプレゼンをトレーニングして、スポーツでいうと訓練ですよ、これはすごくいいだろうなと思います。ただ、訓練だけで終わってはいけなくて、これをゴールにするのではなくて、例えば、世の中の課題とか、本人の問題意識、あるいは何かを創造していく上で、これが役立っていくのだと思います。では、その人たち自身に、問題意識をどう持ってもらうか。高校生にとっては、例えば、社会の中で、あるいは地球の中で、自分がこういう問題に立ち向かっていきたい、僕はこの世界の、この社会の問題解決のために、こういうものを創造していきたいと、まだなかなかない意識だと思うのですが。

ただ、やはりスキルを身につける上ではスタートが早い方がいいと思いますし、あるいは社会課題を、その世界の課題を解決していきたいというセンスをどこかで身につけられるような体験、例えば、留学をして世界中のあちこちへ行って見て、世の中にはこんな問題や課題があるのかと知り、これに対して自分が正面から立ち向かっていきたいというような、自分の身から出るエネルギーというか、そういう体験もどこかでプラスでさせて、結果的にこの取組が生きてくるのではないかなと思います。技術を身につける上では、これはとてもいいことだと思いますし、プラス、そのセンスを身につけられるような取組もあわせてお願いしたいと考えています。以上です。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。他にいらっしゃいますか。

(阿部知事)

私ばかり話して申し訳ない。さっきは体制や手続論の話だけしたのだけれども、中身のな話として、ここに書かれていることはそう悪い話ではないとは思っているのですが、ただ何というか、考え方の理念をもっと明確にできないのかなと。高大連携というときに何を期待するのか、高大連携によって子どもたちにどういうものを、どういうフィードバ

ックを与えられる仕組みをつくるのかという目的が曖昧。高校では学べないプログラムの提供とかキャリア教育のロールモデルの提供とかと書いてあるのだが、それはそうなのだろうけれども、もう少し具体的にイメージできるようなことをしっかり考える必要があるのではないかと思っている。

私なりに考えると、例えば大学で学んで単位認定するというような話というのは、ある程度進んでいる子、進んで学習できる子は、高校にいながら次の大学教育も視野に入れながら学べますよという話ですよ。それは良いことだと思うのだけれども、多分それだけではなくて、大学教育にはいろいろなフィールドワークとかがあって、実際の現実社会とのつながりも高校よりはかなり意識される場になるので、単に大学、高等教育を目指してステップアップをする子どもたちだけじゃなくて、地域社会ともしっかりと多くの子どもたちがつながっていくためのサポートを大学にしてもらいたい話があると思う。それから耳塚先生がおっしゃったように、大学と連携することによって、高校の教育の質自体を上げていくという側面があるのだろうと思う。そういうことをもう少し明確にしないと、何のためにやっているのかということが、何となく高校では学べないプログラムの提供とか、キャリア教育の提供だと個別具体過ぎてあまり理念的なものが感じられないので、もう少しそういう整理も必要ではないかなと思います。

(佐藤こども・若者担当部長)

今のご指摘がありましたので、まず、そのプラットフォームをきちんと整える部分、具体化させていく部分、それから、これによってどういうことを目指していくのか、こういうことがあると良いという、そういう理念もきちんと整理していきたいと思います。ありがとうございます。

(小岩企画振興部長)

それでは、中澤委員、お願いします。

(中澤委員)

少し、ずれてしまうかもしれないのですが、自ら問いを立てて解決策を考える姿勢は、幼児でも結構日常にあるのです。幼児教育支援センターのことにもかかわってくるのですけれども、質といったときに、このことがとても大事なのではないかなと思っていて、幼・小・中で段階を踏みながら高校に向かっていくところに、もう一つの段階としてやっていけないと思います。多分、これは長い時間がかかるかもしれないのですが、このあたりは意識して考えていけたらいいかと、ちょっと話がずれてしまいましたけれども、感じました。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。この議題につきましては、ここで区切りとさせていただきます。

す。本日出ましたご意見も踏まえまして、引き続き、取組を推進していきたいと存じますので、よろしく願いいたします。

東准教授におかれましては、ここでご退席ということですが、今の議論を踏まえまして、最後に何かご発言されたいことはございますか。

(東長野県立大学准教授)

ありがとうございます。特にこれと喋っての話ではないのですが、皆さんのお考えもよくわかりました。本学でも、できることをまだまだ探っているところなので、また今後もご意見等いただけましたら幸いです。どうもありがとうございました。

#### 4 会議事項

##### 平成31年度 教育関連予算について

(小岩企画振興部長)

それでは、続きまして会議事項に入りたいと思います。本日の会議事項は、平成31年度教育関連予算についてです。お手元の資料3と4をご覧ください。では原山教育長から、ご説明をお願いします。

(原山教育長)

時間もありませんので、簡潔にと考えております。

資料4-1からご覧いただきたいと思います。教育委員会の5つの重点項目に応じまして、施策を提示しています。この中で、今日は「幼児教育」、「高校改革」、それから、「高校生の留学」、そして「特別支援学校改革」についてご説明をしたいと考えております。

資料4-2をご覧ください。東准教授のお話から全て連続していると思っておりますけれども、まさに試行錯誤して、いろいろなフィードバックをもらいながら探っていくということを、幼児から小中高大まで続けてやっていくのだろうと思っています。この信州幼児教育支援センターでありますけれども、幼児教育、質の高い幼児教育を幼稚園、保育所、認定こども園、全てにおいて実現すると書いてあります。では、質の高い幼児教育というのは何だという話になるわけです。

幼児において遊びの本質というのは、まさに試行錯誤だと思います。その試行錯誤に対して、保育者たちがどういうフィードバックをすれば、この上に掲げてあります幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を実現できるのかと。今回、幼稚園の教育要領、そして保育所の保育所指針、全て同時に改定され、この姿を目指してやっていくという形になります。これをどのようにしてやっていくか、これが質の高い幼児教育を実現するためのポイントだと思っています。

そしてこのセンターの体制図ですが、実現したいのはこの全ての園とつながって知を循

環させ共有する、そういうエコシステムをつくっていくということがねらいです。ですので、いろいろな知を、例えばシンクタンクのような知、そして各園で取り組まれている知、それを循環させて共有するというのを、この幼児教育支援センターでやっていきたいと思っています。したがって、幼児教育支援センターそのものも、どんどん成長し、発展する、そういう仕組みにしていきたいと思っています。

次に、資料4-3をご覧ください。高校改革ですが、高校の学びが変わらなくてはいけないということです。試行錯誤して、いろいろフィードバックをしながら探っていくと、そういう形にしたいということでもあります。3つの円がありますけれども、その一番上、生徒起点、個々のペースに応じた、一人ひとりの試行錯誤に腹を据えて付き合っていくということだと思っています。そのときに、E d T e c hといったデジタルツールを最大限活用しながら、それを行っていく。そしてリアルから始まる学び、あるいは社会に開かれた多様な学び、まさに試行錯誤から始まって学びを深めていくと、そういうあり方に変わっていくことを目指しています。そしてこれは、実は、高校自体も変わっていかなくてはいけないと思っています。常に進化していく、試行錯誤しながら新たな知を取り入れながら自己改革していくという、そういう仕組みをビルトインする必要があると思っています。そのためにモデル校という仕組みをつくりながら、先進的な学びを取り入れながら自己変革をしていくことをやっていきたいと思っています。

それから資料の4-4であります。海外での学び、留学です。短期・長期がありますけれども、海外の学び、まさにこれは試行錯誤に最適の場といえますか、試行錯誤しかない場であります。ここで、自分で何かを見つけて、そして学びに生かしていくということを是非やっていきたいと思っています。長野県の留学者数、0.7%という低い状況から、これを少なくとも5年間で倍増していきたいということで進めていきたいと思っています。これをクラウドファンディングでありますとか、大企業の寄附でありますとか、そういった財源を使いながら進めていきたいというのがこの事業です。

それから資料4-5、特別支援学校の改革です。施設的な環境、人的な環境、あるいは学びの質、内容、言葉が適切かどうかわかりませんが、かなり手つかずのまま残ってきてしまっているというのが現状ではないかと思っています。そして、これを最先端に持っていくように抜本的に見直し、改善していきたいというのがこの取組です。また、その取組を社会にも、あるいは小中学校にも還元し、循環するような取組をやっていきたいということでもあります。この年度ごとに、特別支援学校改革に取り組んでいきたいと思っています。

詳細な内容は資料をご覧くださいということで、どういう考え方でこの改革といえますか、今回の予算案を作成したかということについてのご説明とさせていただきます。以上です。

(小岩企画振興部長)

では、佐藤こども・若者担当部長から、資料5と6に基づき説明をお願いします。

(佐藤こども・若者担当部長)

資料5は県民文化部の要求概要ということでご覧いただき、資料6「平成31年度子ども・若者支援予算要求のポイント」に基づいてご説明します。基本的な考え方としましては、本年度スタートした「子ども・若者支援総合計画」を着実に推進する2年目ということで、そういったことをポイントとして考えています。

目指したい姿の1つ目「子どもを産み、育てやすい環境づくり」については、様々な課題を複合的に抱えている子どもや家庭に対し、現在も様々なサービスがございます。例えば、県でいえば福祉事務所の生活保護家庭やひとり親家庭への支援、保健所の専門相談などの個別形成のサービス提供もありますし、市町村等で扱っている困難事例等への専門的、技術的助言や支援を行う信州母子保健推進センターや児童相談所などがあります。他にも、市町村や民間でも様々なサービスを行っておりますので、そうした個々のサービスを充実するというのも、ひとつ、子どもを産み育てやすい環境づくりを推進する上で重要な取組だと思います。それとあわせて、一つ一つの課題をそれぞれの機関が別々に対応するのではなく、包括的、一体的に対応すること、そこが重要だと考えています。そのためには、機関同士のつながりを太くする取組や、その家庭や子どもにちょうどフィットするサービスを届けるための調整をする機能、そういった取組が重要だと思っております。

「子ども家庭支援ネットワークの構築」については、本年度、現在4つの市町村とともに、ネットワークを構築していくための課題や必要な機能、好事例等を整理しているところです。それを各市町村に広めて、ネットワークの構築促進を図ってまいりたいと思っております。また、児童家庭支援センターですけれども、これは、小規模市町村とともに一緒に支援にあたりたり、児童相談所の委託ケースを担当したりするなど、児童相談所と市町村の中間的な役割が期待されるセンターです。この設置促進を図ってまいりたいと思っております。それからスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーにつきましては教育委員会の事業になりますが、この事業はまさに先ほど申し上げた連携を太くする、そういった点で非常に重要な事業だと思っております。

「経済的負担の軽減」については、これまでも、県独自の給付型奨学金事業ということで、ルートイングループからの寄附を活用させていただいた、児童養護施設など社会的養護の子どもたちを対象とした「飛び立て若者！奨学金」、また、経済的な理由で進学が困難にならないよう支援する県内大学進学・修学奨学金などの取組を行っているところですが、例えば、募集回数を増やすなどの見直しにより、より多くの学生が活用できるよう充実を図ってまいりたいと思っております。

「子育てと仕事の両立支援」につきまして、待機児童ゼロだった長野県が、本年度4月には松本市、安曇野市、10月にはさらに塩尻市でも待機児童が発生しているという状況です。待機児童対策として市町村の抱える最大の課題は保育士の確保ですので、9月補正で保育士人材バンクへの登録の促進の取組など、緊急対策に着手いたしました。これを続けていきたいと思っております。また、保育士の確保とあわせて、施設整備により多様な保育の受け皿を整備すること、これも待機児童対策として重要な二本目の柱だと思っております。

特に待機児童となっているのが3歳未満児ですので、未満児の受け皿となる小規模保育などの地域型保育事業の設置促進を図ってまいりたいと思っています。

それから、目指したい姿の2つ目「置かれた環境にかかわらず自分の未来を切り拓ける社会づくり」についてです。「家庭養育の補完」につきましては、複数の機能を持つ子どもの居場所として、平成28年に2か所のモデル事業でスタートした「信州こどもカフェ」ですが、現在、約80カ所まで増えてきています。来年度は、株式会社テクノホームからいただいた寄附金等を活用し、小規模団体等に運営費補助を行う事業などを創設したいと考えております。

「家庭的養護の推進」についてです。家庭で育ち、18歳で家庭を離れた子どもたちは、困れば親が相談に乗ったり、支援をしたりということができますが、施設などで育てて退所した子どもたちの中には、施設を離れた後、困り事を抱えて進学や就職の継続が難しくなっている子どもたちが多くいます。そうした子どもたちの自立支援、アフターケアの事業を新たに実施したいと考えています。そのほか、「発達障がい者等の支援の充実」や、「児童虐待防止」のための児童相談所の体制強化などに取り組んでまいりたいと思っています。

目指したい姿の3つ目「子どもたちの生き抜く力を育む」です。幼児教育支援センターについては、先ほどお話がありました。信州やまほいくについては、本年度、全国の自治体と連携して森と自然の育ちと学び自治体ネットワークを創設し、110を超える自治体が参加しているところです。そういったものも活用しながら、質の向上や県内外への情報発信に努めてまいりたいと思っています。

以上、3つの目指したい姿に向けて、オール信州で、社会全体で支援をしていくために取り組んでまいりたいと思っています。私からは以上です。

(小岩企画振興部長)

ただいま、それぞれの予算要求のポイントをご説明いただきました。残りのお時間で、この教育関係予算に関する意見交換を行いたいと存じます。

非常に多岐にわたる内容ですが、ポイントとしましては、幼児教育、高校改革、特別支援学校改革、このあたりをテーマの中心に据えてご意見をいただければと思います。もちろん、その他のご意見もいただければ結構ですが、まずこの3つを中心に置かせていただきたいと思います。特にご指名はいたしませんので、それぞれご意見のある方から挙手いただいて、ご発言をお願いします。

(中澤委員)

信州幼児教育支援センターのことで、少し思いを伝えさせてください。今まで、保育所は子どもたちを預かる機能、幼稚園は幼児教育というふうに分かれていたのが、教育要領の改定で、幼稚園も保育所も認定こども園も、みんな大事な、大切な幼児教育の場ですよということが同じベースになったので、一緒になって質の高い幼児教育を考えていくベースが今、整ってきたなと思っています。ただ、今までのありきたりの研修をやっているのは、

本当に大切な学びとか、本当に大きな変化にはならないのではないかなという気がすごくしています。センターを立ち上げるということであれば、子どもたちの学びや変化だけでなく、そこで働く保育者や教員の方たちが毎日喜びを持って仕事に取り組めるような、何かそんな大きな変化につながるというなと思っています。

一つは、やはり、この質というのは何かと、原山教育長さんからもお話しがあったのですけれども、やはりここを問うていくのに、例えば夢中になって遊ぶ子どもといっても、何に夢中になって遊ぶ子どもか、それはどうやったら生み出せるのか、どんな環境があったらいいのか、保育者がどうあればいいのかなど、本当に考えなければいけないことや、やらなければいけないことが山ほどあります。このセンター機能として、センターがこうあらねばならないではなくて、そこに関わる方たちが試行錯誤しながら、ありきたりではない研修のあり方、ちょっと失敗もしてしまうかもしれないけれども試してみる価値のあることとか、そんなことを思い切ってやれるような面があれば、まずはいいなと思うことが一つです。

もう一つが、これだけ子どもたちに体験が必要と言われていて、頭からではなく体験から学び取っていくことの大切さをこれだけ言われてきて、いろいろなことがわかってきて、私も同じように長い間幼児教育をやっている、本当に体験が大事だなということも感じています。そのことを含めると、一つはみんなで学び合う場所が、机上の問題であったり、みんなで考え合う場であったりするといいのですけれども、もう一方で、何らかの形で体験ができていく学び、そこをもう一つ確保していくような、その2つの機能がセンターの中で生まれたいなと願っています。以上です。

(矢島委員)

これを見ると、連携ということが一貫しているのが本当によくわかります。教育委員会と知事部局の連携を始めとして、そして子どもというところで幼保・小中高大の連携、そういうところで同じ方向を向いているということが、すごくよくわかるような内容になっていることをうれしく思います。

その中で、先ほどの幼児教育支援センターの設置ですが、例えば、連携というところでさまざまな幼稚園や保育所が、中澤委員がおっしゃった、本当の意味での質の向上という、質が何かというところを体験するという観点から、保育者同士を交換するというか体験してみる。幼稚園から保育所に行ってしばらく、1年でも交換してみるとか、あと保育者同士の交換で体験してみることも一つの方法かなと思いました。

それから特別支援教育ですが、今まで本当に手が入ってこなかったところを、本気で改革しようというのは本当にうれしく思います。教育長がおっしゃったように、全国平均に追い付くだけではなくて、全てにそうなのですから、長野県のオリジナリティ、長野県らしさ、これぞ長野県というようなところがどんどん出てくればいいなと思います。子どもたちが「本当に大切にされるというのはどういうことなのだろうか」といったところで、先ほどの高校のモデル校もそうですが、そういうところでオリジナリティをっか

り出していただきたいと思います。

そういう期待を持ちながらも、もう一つ、知事が冒頭でおっしゃった学びの県づくりに向かうところで、やはり、私はまだ取りこぼされてしまっている子どもたちが大勢いると思います。先ほど知事部局のほうで養護施設を退所する子どもの自立支援のアフターケアという、そのトータルで見ていただいて、予算化されていることは本当にいいなと思います。しかし本当に残念ですが、子どもを性被害から守る条例ができましたが、多くの子どもが性被害に遭っている現状の中で、やはり、暴力を受けている子どもが加害者にならないような、被害をこれ以上増やさないような、大人も学ぶという点でまだまだ予算が足りないかなと思います。というのは、子どもを性被害から守るための支援事業として、大人も学ぶということで予算がつかいましたが、私がやっている人権教育については、今年度はもう8月で全て予算が終わりということを言われております。今、まだまだ学びたいと思っている長野県の大人の方が受けられない状態にいるということなので、その県民の要求に応える、県民の声を聞くということも是非お願いしたいです。それが全て子どものほうに返ってくるので、全ての子どもを暴力の被害者にも加害者にもしないためにも、実際の現場の声を聞くということを学校で頑張っていらっしゃる先生方もいるので、大人が学ぶというところで、少し視点を入れていただきたいなと感じました。以上です。

(耳塚委員)

3点ございます。1点目は幼児教育支援センターについてですけれども、これは既にご意見もございましたので、ひとつ簡単に、相互に学び合う仕組みとして育てていくということがとても重要ではないかと思っております。

2点目は、高校改革について、資料4-3であります。高校段階で学びの改革を進めていくといったときに、やはり高校の段階であるということを考えますと、方向性というのは一つではなくて、多様にならざるを得ないと思います。例えばアカデミックな性格が非常に強い改革から、ローカルな課題解決というところに重点があるような学びの改革まで、いろいろだと思えます。この点でモデル校を設定して、また幾つかの種別を設定しているというのは必然的なことであろうと感じております。これも是非、お進めいただければと思います。そして、このモデル校方式を取るということは、エビデンスに基づく施策という点からも非常に重要だと思えます。モデル校で成果を検証して、どこかの段階で全県展開を図るとか、それとも、もうやめるのかといった判断をする材料が手に入るようになりますので、その意味でも重要な施策であると思っております。

それから最後の点は、資料の4-4の海外での学び推進事業ということで、現状では全国の中で決して高いとはいえない高校生の留学者の比率というのを高めるためには、そのような経済的な支援というのが重要であると思えます。ただ、もう一つの留学を妨げる壁というのは心理的な壁といいますか、障壁が相当大きくて、大学生でも少し消極的になる学生が相当数います。高校生はもっといるだろうと思っております。その意味では、資料1で示されている、高大連携プロジェクトの中のグローバルな学びへの招待というところ

で、大学キャンパスで高校生が海外交流という構想がございますけれども、こういうのは留学に至る前の段階として活用されるべきと思います。私どもの大学でも、夏にサマープログラムという、英語で講義や討論を行うという授業を複数開設していますけれども、そこには日本の学生、それから海外からの留学生、特に協定校から短期留学で日本に来る学生を呼んでいます。それに加えて、高校生も参加できるような仕組みをつくったところ、非常に多いわけではありませんけれども、積極的な高校生が参加をして、留学に至る前段階として受講や討論の経験を積む機会になりました。是非、この県民文化部の方と連携を強めていただいて、留学の増加にもつなげていただければと思います。以上です。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。

(塚田委員)

耳塚先生と同じように、高校改革の4-3ですが、やはり生徒目線からいっても、いろいろなこういうチャレンジに対して、自分で選択の余地があるというのは素晴らしいことだと思います。そういうモデル校がたくさんできて、いろいろ多様化する。生徒としての思いというのも、これによって叶えられるかなと思います。

また4-4の留学とか、海外での学びということがございますが、これも短期留学でもきっかけになれば、またもう一回挑戦したいという生徒さんもいらっしゃるでしょうし、それを長野県、それといろいろな寄附等々の企業の力を借りるというのも、同じ方向を見ていると考えられますので、是非進めていただきたい。これだけ受け入れ側の体制も整って、異文化との交流というのは必ず必要なことですので、これは2015年で0.7%となっておりますけれども、他都道府県も同じように留学生を増やすと、留学制度を活用するということになってくると思いますので、長野県も是非この支援の制度については同じベクトルでやっていただきたいと思います。以上です。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。それでは、教育長、佐藤部長からもいかがでしょうか。

(原山教育長)

幼児教育支援センターは、実は市町村の教育委員会の方とか、いろいろな場面でご説明したところ、非常に期待が高いです。一方で、実際に保育所や幼稚園の先生方が学ぶ機会を本当に保障できるのかという部分での不安もあります。そういう意味では是非、県民文化部でやっていただいているいろいろな取組、つまり保育者の量的な整備や基本的な処遇を含めて、そういった環境整備を是非やっていただかないと、保育者の質の向上というのはなかなか望めない部分があるので、そこは両者が合体しながら、そういう方向性を見つけていっていきたくて思っていますので、是非よろしく願いしたいと思います。

(佐藤こども・若者担当部長)

幼児教育支援センターのお話がありました。そういったところでも連携が必要ですし、耳塚先生のお話をお伺いして、本当に高大連携という部分、その部分だけではなくて、教育委員会が目指していく方向の中で、県民文化部としての取組もうまく噛み合わせて推進していくことができると感じたところです。ありがとうございました。

(小岩企画振興部長)

まだ、時間に余裕がございますので、知事からもいかがでしょうか。

(阿部知事)

私は予算案を取りまとめる立場なので、教育委員会と県民文化部への細かい話は予算査定でいろいろ言いたいと思いますけれども、今のうちに伝えておいたほうがいいかなと思うことだけ、ちょっとお話ししたいと思います。

まず幼児教育支援センターについて、私は単に組織をつくるということでもいいのかなという問題意識を持っています。この組織は、長野県初でなくて、もう既に他の県でもつくっているわけですね。そうしたところの反省点を踏まえて、より上を目指さなければいけないだろう。「信州やまほいく」をやっている、自然教育の部分については信州大学も熱心に取り組まれているし、県立大学の安藤理事長とも話したら、県立大学もしっかりやっていきたいということなので、この長野県の幼児教育の目指す姿をもっとクリアにしたほうが良いと思います。それからこの組織図を見ると、県庁の中で何かごちゃごちゃやっているだけのように見えてしまうのだけれども、それでいいのかなと。例えばシンクタンクが横出しになっているけれども、もっと大学の人や幼児教育の専門家や実務家などに、このセンターに入ってもらおうとか。この体制自体が、何となく官僚的な組織に見えてしまうのだけれども。

(原山教育長)

さっきもちょっとお話ししたのですけれども、やはり、まず現場全てとつながりましょうと、そして、幼児教育にかかわる皆さんとつながりながらやっていくということをシステムとして動かしていきたいという中で、絵にしてしまうと、今の段階ではこういう形にならざるを得ませんけれども、中に取り込むとか、あるいはセンター長自身も当面は県の教育次長が兼務する形にしていますが、このあり方も変えていく必要があると思います。これは、進めていく中で変わっていくものと思っています。これで完成形だとは全然思っていない。

(阿部知事)

これまで検討してきた経過もあるので、あまり私がいろいろ言ってしまうてはいけないのかもしれないけれども。幼児教育の確保のためには、もちろん質を高めなければいけな

いけれど、今、人の確保が大変だというのがまず問題としてある。でもこの体制だと多分、人の確保についてはまた別の人たちが考えるわけですよ。もちろん人の確保についての話と、質の向上の話とはレベルの違う話だと思うけれども、でも一定程度の人が集まらなないと、質の向上も難しいというところもあって、かなり関連していると思うのですよ。

この幼児教育支援センターがどこまでを射程距離に入れて、ここがやらないものは誰がどう連携してやるのかというのをもう少し具体化させないといけない部分があるのではないかなと思います。

今、量的な話もしましたけれど、例えば人材育成については、先程、高大連携で大学の話がありましたが、県立大学もこども学科をつくってやっていこうとしているので、県内のそういう資源をどう組み入れていくかは、単に横出しのシンクタンクでいろいろな大学と連携しますという抽象的なレベルの話ではまずいのではないかなと思います。もっと、センターの中に入れてもらうとか、誰とどう具体的に連携するのかという具体的な話が必要なのではないかなと思います。それから、中澤委員は非常に穏やかに発言をされていますが、私からはもっと厳しく申し上げると、さっきの高校のところではモデルという話がありましたけれども、幼児教育というのはどういうものを目指すのかというのは、単に研修カリキュラムをつくってということではなくて、こういう子どもたちは生き生きしているよね、こういう先生の教え方がいいよね、ということを実際に体感できる現実のフィールド、場所というのが、本当は必要なのではないかなと思います。県立大学の附属保育園がなくなっちゃったりであれですけども、本当はそういうことも含めて考えていく必要があるので、そこは課題として認識してもらえるといいかなと思います。

それから、細かい話はやめると言いながらあと2つだけ申し上げます。海外での学びは、私の公約でも掲げているし、どんどんやっていっていただきたいと思っていますが、荻原委員もいらっしゃいますが、オリンピックに出た方々と話したら、世界の舞台を経験するとやっぱりその後が全然違いますよねという話もあったので、そういう意欲と志がある人たちをどんどん応援したいなと思っています。だから、そういう意味ではこのスポーツとか文化・芸術を入れてもらっているのはいいのですが、ある程度しっかり予算をつけないと、極めて中途半端な支援だと、あまり成果が出ないのではと思います。何と申すか、日本人がいっぱい集まっている語学研修みたいな、なんちゃって留学みたいなものをいっばいさせてもいかなものかと思うので、質を確保すると同時に、その分子算はちゃんと確保しないとイケないだろうと思うので、何となく人数を増やせばいいという発想にならないようにしてもらいたいと思っています。

最後一つ、極めて細かい話ですけども、知事部局と両方に関わる話なので。スクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーは、私は増やしていった方がいいと思っています。昨日、高校時代に入院していた方々と懇談させていただき、学校に籍を置きながら入院しているということの困難さや不安などを聴かせてもらいました。いろいろ話途中で思ったのは、例えばICTを使って遠隔地からでも授業に参加できるようにすることは、是非、教育委員会にどんどんやってもらいたいと思います。また、寄り添う人、

コーディネーターみたいな人を置いてもらえるといいのではないかという話もありました。病院と学校と両方に籍を置いている子どもたちというのは大変だと思います。病院ではこういう治療を受けなさいと言われながら、学校は授業日数が足りないと単位が取れないかもしれないよというような話になっていたり。スクールカウンセラーも、学校外の子どもの居場所に出向いてカウンセリングをするみたいな話がありますが、子ども一人ひとりにちゃんと寄り添えるような体制を教育委員会で考えてもらいたいと思いますし、これは多分、病気の子もだけじゃなくて、さっき矢島委員がおっしゃっていたように、暴力を受けている子どもたちとか、誰一人取り残さないSDGsの考え方からいけば、やっぱり個別にしっかり対応してあげなければいけない子どもたちがどこにどれぐらい存在しているかをちゃんと把握して、しっかり寄り添えるようにしてもらいたいと思いますので、是非、よろしくをお願いします。

(小岩企画振興部長)

今、知事からいくつか論点提起がありました。世界の舞台ということで荻原委員のお名前が出ましたけれども、荻原委員からもしご意見、ご発言がありましたら。

(荻原委員)

知事のご意見には賛同、賛成いたします。やはり、単に数合わせの留学ではなくて、本当にやるならもうまじめに、まじめと言ったらちょっと失礼なのですが、徹底的にやるべきだと思います。例えば、こちらに国際大会支援・スポーツ文化活動と書いていただいていますけれども、ある高校生を一人派遣する上で、指導者も当然一緒に行かなければいけないでしょうし、いわゆるサポートスタッフが数人必要になってくるので、一人につき2～3人のサポーターが必要になってくるということを考えると、いろいろな意味でお金もしっかりつけないと、単に一人で行って頑張ってきてというだけではいい結果は望めないと思います。多分、これは国際大会、スポーツ文化活動だけではなくて、他の学びも一緒ではないかなと。先ほど知事からコーディネーターというお話がありましたけれども、その留学先の教育機関と深い関わりのある、例えば日本人の方がそこにおいて、生徒さんが物怖じしてしまうようなところをきちんと後押しをしてあげるようなことも大事ではないかなということを感じました。以上です。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。

(原山教育長)

海外での学びについて、知事からもお話がありましたが、海外留学している長野県出身の生徒さんたち、学生さんたちがいらっしゃるわけです。彼らの中にも、実は、長野県の子どもたちのためになりたいという思いを持っている人たちがいっぱいいるのですね。そ

ういう人たちを僕らも活用させてもらうような仕組みで応援するとすごくいいのかなと思っています。また、学生だけでなく、大人にもたくさんいるのですね。実際に、本当に一緒にやってやりたいという人たちがたくさんいるので、そういう人たち等を巻き込みながらやっていけば、本当にある意味、試行錯誤で学ぶという、そして視野が広がるという大きな体験が得られるのではないかと思います。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。お時間も大分残りが少なくなってきましたが、あとお一方、ご発言いただければと思います。先ほどの幼児教育の関係で、矢島委員からさらにご発言があれば伺えればと思いますが、いかがですか。

(矢島委員)

ありがとうございます。センターの体制というところですが、それぞれの現場が困っているところにきちんとアドバイスできるような専門性を持ってほしいと思います。連携という点では、発達支援、発達障がいであるとか、障がいを持つ子どもへの支援がきちんとできる、インクルーシブ部門というふうにはここは出ていますが、そういう専門的な支援ができるような体制もあつたらいいかなと感じました。それと、保育者の適切な関わりということで、やはり保育者の質の均一化、向上は本当に大事なと感じております。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。平成31年度予算につきましては、年明けには知事査定もございますし、これからまさに具体的な議論になってきますけれども、本日皆様方からいただいたご意見を踏まえ、教育委員会と知事部局が十分連携しながら、前回定めました大綱に基づき施策を実施していきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、議題についてはこれで終了とさせていただきます。

最後に、事務局から2つご案内がございます。

まず1つ目、お手元にお配りしました「学びの県づくりフォーラム」のご案内でございます。こちらは、1月27日に実施を予定しています。しあわせ信州創造プラン2.0がスタートしていますけれども、学びとは何なのかということをお県の皆様と一緒に考えていくきっかけになればということで、長野市のメルパルク長野において開催する予定です。ゲストにご覧のお二人をお迎えし、知事も含めトークセッションを行う予定です。委員の皆様方にも、ご都合がつけばぜひお越しいただければと思います、お知らせをいたしました。

2つ目、次回の会議の日程につきましては、おそらく年度内は難しいと思いますが、改めて事務局からご連絡を申し上げますので、また日程調整をお願いします。

## 5 閉 会

(小岩企画振興部長)

以上で、本日の会議事項は全て終了です。これをもちまして、平成30年度第2回長野県総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。